



JIAM開講25周年によせて

関西学院大学大学院経済学研究科・人間福祉学部 教授
小西 砂千夫

バブルの余韻がまだ残る平成5年度にJIAMは開講された。当初、1,000人強であった研修修了者・受講者数が、29年度には6,500人程度と、大きく伸びている。こう書くと順調に拡大してきたようであるが、なかには、平成21年度のように急減した年度もあった。経済全体が右肩上がりのイケイケの時代ではなく、市町村の職員数が減少し、研修費予算がタイトになり、過去には厳しい停滞期を経験したにもかかわらず、近年の増加ぶりであるから、そこにはJIAMの研修のあり方を、時代の要請に応えながら変化させてきた痕跡がうかがえる。JIAMそのものの性格を大きく変えるような、アイデンティティにかかる改革を経験してきたうえでの実績である。それだけに、これまでのあゆみに深い敬意を表したい。

筆者は、近年では、年に3度ほど、研修担当を引き受けさせていただいている。ありがたいことに、企画段階からいろいろとご相談をしながら、作り上げていく楽しさを経験させてもらっている。前年度で問題であったと思う点は、その都度、事務局のみなさんと課題として共有し、企画時にその解消に向けて意見交換を行っている。このような作り上げる喜びのある研修はほかにはない。研修初日の夜の交流会はほかの研修でも実施しているであろうが、2泊3日の2日目の夜も、自由参加ながら意見交換会を企画してきた。お忙しいなかで担当職員の方がご協力を惜しまないことで実現してきた貴重な場である。それらを通じて、参加者の問題意識を伺って、その場で研修内容に反映させることができる。

JIAMの研修には、このような血の通った、温かいホスピタリティがある。それは、開設以来、四半世紀をかけて作り上げてきた組織風土であり、時が流れて人が入れ替われど、常に保ち続けてほしい。それがJIAMの真骨頂である。

筆者が担当する3つの研修のうち、2つは主に財政課職員を対象としている。地方財政の世界は奥深い。制度の運営に関して学ぶべきことは実に多い。制度が変わり、学ぶべきことは増える一方。そのなかで、ほかではなかなか話さきれない、奥深いところまでじっくりお話しできるのも、JIAMならではである。マニアックと言えばそれまでだが、そこを話さないと、財政の仕事の面白さもまたわからない、とっておきの部分がある。3日間、話す方はそれほどでもないが、聞く方はさぞかしご苦勞であろうなか、受講生のみなさんは根気よくつきあっていただける。それだけでなく、研修を通じて得たものがあるとも言っていただける。受講生のご努力があってこそその研修であることを改めて思う。併せて、毎回、ご出講に協力いただける総務省のみなさまが東京からお越しいただけるのも、受講生の熱意に応えてのものである。ご協力に感謝したい。

筆者の担当する研修が、JIAMの理念に適い、JIAMの発展に少しでも寄与することを願っている。地方自治体における人材育成に貢献できる意義深さを毎回感じている。